

永野小学校・学校だより(6月)

祈る 大豊作

校長 小泉 啓治

5月24日に5年生が舞岡で田植えをしました。また、29日には2年生がサツマイモを植えました。どちらもたくさんの方々のお世話になってできました。サツマイモ畑用の土地を提供してくださった方、そこをご紹介してくださった方、今年も畑の面倒を見てくださる方、畑の開墾や田んぼの代かきにご協力いただいたたくさんの保護者の皆様、舞岡公園・小谷戸の里のボランティアの方。お陰様で秋の収穫が楽しみです。二つの学年では、この栽培活動が総合学習や生活科の中心になっていくかもしれません。良いスタートが切れたことに改めて感謝いたします。

さて最近、高杉 良の『祖国へ、熱き心を』(東京にオリンピックを呼んだ男)という本を読みました。昭和39年の第18回オリンピック東京大会の実現に大きな功績を残した、ロサンゼルス在住の日系二世・和田勇氏のことを書いた本です。私にとって、小学生の時に開催された東京オリンピックは、その前にどんなことがあったか知らない、既成事実としてのオリンピックでしたが、なるほどそんな努力があったのかと教えられる本でした。

その中で、昭和24年の日本水泳選手団(古橋選手や橋爪選手ら6名)が全米選手権に参加した時の話が載っています。前年のオリンピックに出られなかった日本は、オリンピックの期間に会わせて日本選手権を行いました。その結果、多くの種目でオリンピックの優勝タイムを上回る記録を出したのです。しかし、敗戦国の悲しさ、どこの国もその記録を認めてくれませんでした。「日本の時計は正確ではない」で片付けられてしまいました。そこで翌年の全米選手権に選手を派遣して記録が嘘でないことを証明しようとしたのです。(その時に選手団を自宅に泊めて面倒を見たのが和田氏)結果は出場した6種目中5種目に優勝し、9つの世界新記録を樹立して、見事目的を遂げることができました。その一報が入った(もちろん今のような衛星中継などはない時代です)東京では、新聞の号外が出て町中の人々が争ってそれを読みました。特に古橋選手は「フジヤマのトビウオ」と言われ、この時の快挙は、自信を失っていた国民に夢と勇気を与えました。

5月20日に平戸永谷川のクリーンアップが行われました。多くの方々に混じって草取りをしました。幸い愛護会の方と少しおしゃべりができました。定年後のボランティアとして活動に参加されているその方は、川沿いの遊歩道や花壇が年々きれいになっていくことが嬉しくてならない様子でした。「ハヤが上ってくるようになった」「カワセミはいつもあそこに止まっていて、えさをねらっているよ」などと教えてくれました。そして、この活動に参加することが自分の励みになっていて、他の用事なんかもてきぱきと片づけようという気持ちになるんだよとおっしゃっていました。

どちらも、夢や希望ということについて考えさせられました。秋になってサツマイモやお米がたくさんとれたらと、もちろん思いますが、同時に夢や希望も大豊作にしたいものだと考えています。